

## 当院における IVL 治療に関する検討

竿崎 佑弥<sup>1</sup>、井口 琴音<sup>1</sup>、笹木 彩可<sup>1</sup>、福浦 凌<sup>1</sup>、細川 直人<sup>1</sup>、工藤 誠之<sup>1</sup>、三輪 裕騎<sup>1</sup>、田村 隆始<sup>1</sup>、寒河江 磨<sup>1</sup>、奥田 正穂<sup>1</sup>、平田 和也<sup>1</sup>、管家 鉄平<sup>2</sup>、華岡 慶一<sup>2</sup>

<sup>1</sup>華岡青洲記念病院、<sup>2</sup>華岡青洲記念病院

【はじめに】2023年3月より石灰化病変に対する治療デバイス Shock Wave 社製 Intra Vascular Lithotripsy (以下 IVL) が使用可能となり、当院でも使用を開始している。IVL を用いた PCI を行う場合、STENT 留置が必須になるなど手技の制限も存在するが、専用の wire への交換が不要であることなど簡便性・安全性に期待され当院でも使用する頻度が増加している。【目的】当院で IVL を用いた PCI を行う際、IVL バルーンサイズ選択の基準が統一されていないことや、IVL 使用後の cruck 所見の有無から STENT 留置前に追加拡張の必要性を検討しているが、手技が統一されていないのが現状である。そこで今回、IVL を用いて PCI を施行した症例の治療内容・STENT 拡張率に関して検討を行なったため報告する。【方法】2023年3月から2025年7月までに行なった PCI で、OCT guide にて IVL を使用した症例を対象とし、OCT で cruck の有無、IVL 後に追加拡張を行った症例と、追加拡張を行わなかった症例でそれぞれ分類し STENT 拡張率に影響があったかを検討した。【結果】対象病変は 53 病変で IVL 後に OCT で cruck を観察することができた病変は 40 病変で、そのうち追加拡張を行った病変は 16 病変であった。cruck を観察することのできなかった病変は 13 病変で、追加拡張を行った病変が 5 病変であった。それぞれの群で STENT 拡張率の平均値に差は認めず、良好な結果であった。【考察】STENT 拡張率が低かった症例の傾向に関して考察を行なったため、詳細は後日報告する。【結語】今回の検討では、石灰化に対する IVL での治療の有効性が示唆された。